

彩の歳時記

平成二十四年 六月

六月や 峯に雲置く あらし山

芭蕉【1644～1694】「杉風宛書簡」

「六月の空の下、緑滴る嵐山、その峰の上には真っ白な入道雲が湧いている」

京都「嵐山」は紅葉の名所として古くから歌に詠まれた歌枕。芭蕉は「紅葉」ではなく「雲」を詠み、嵐山の壮大さを写しています。元禄七(1694)年、閏(うるう)五月末から六月十五日まで、芭蕉は嵯峨の渡月橋北詰の落柿舎(らくししゃ)に滞在、その折、詠んだ句。

落柿舎は芭蕉に「洛陽に去来ありて、鎮西(ちんせい)に俳諧奉行なり」と称えられた高弟向井去来【1651～1704】の住居。現存する落柿舎は「170年に再建の際に移された処で本来の所在地ではないが、今も多くの俳人達が訪れ、投句箱に投句してゆきます。

「柿主や梢はちかきあらし山・去来」

六月の異称

水無月

「水な月」＝「水の月」。旧暦の七月にあたるので異称に長夏・常夏など。

六月の暦

一日 衣替え 日本特有の習慣だが、時期は中国の風習に倣い、平安時代の宮中で始まる。

江戸の武家での袴・単衣など時期の制度化から、明治政府による制服制度化を経て一般に定着したが、現在は、官公庁・企業・学校などでも、厳密ではない。

きものの衣替えは伝統を重んじており、その文様・柄なども季節感を醸し出している。

五日

芒種【二十四節気】 芒種「稲や麦など穂が出る穀物」の種を蒔く時期。

六日

お稽古の日 昔から、六歳の六月六日から始めると上達すると言われていることから。

八日

長明忌

「方丈記」で有名な鎌倉時代の随筆家の鴨長明【1155～1216】の忌日。



「方丈記」は「徒然草」「枕草子」と並び日本三大随筆。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」の書き出し、同時代の災厄の記述が日本の現状に重なり、新たな読者を得ている。

八日

梅雨入り(平年) 社会通念上・気象学上は春の終わりであるとともに夏の始まり。

十七日

父の日

【第三日曜日】

十九日

桜桃忌

日本で最も人気の高い小説家の一人 太宰治【1909～1948】の遺体が



玉川上水で発見された日。誕生日も6月19日。晩年の作品『桜桃』に因む。東京帝大仏文科中退。青森県五所川原市に生家、斜陽館「重要文化財」。父は、明治の大地主、津島源右衛門。子に小説家・津島佑子・太田治子がいる。

二十一日

夏至【二十四節気】 夏に至る。北半球で最も日照時間が長い日。

三十日

夏越の祓

十二月と六月の晦日に行われ、平安時代から続く。一年の半分が過ぎ、以降の疫病除けを祈願する。「茅の輪くぐり」は蘇民将来(そみんしょうらい)の故事に基づく神事。

京都の賀茂川神社が有名。和菓子の水無月を食べる風習も。



六月の歌

雨の慕情

詞 阿久悠【1937～2007】

曲 浜圭介

1980年八代亜紀の歌唱でヒット、第22回レコード大賞。「雨々ふれふれもつとふれ」のフレーズが六回繰り返され、その際の左手の手のひらと肘を直角にして上下に動かす振り付けと相まって人気を博した。

作詞の阿久悠は、昭和を代表する作詞家で他に『北の宿から』、沢田研二の『勝手にしやがれ』、ピンク・レディーの『UFO』などがある。2011年10月に母校・明治大学構内に阿久悠記念館 AKU YU Memorial Museum が開館。

心が忘れたあのひとも
膝が重さを覚えてる
長い月日の膝まくら
煙草プカリとふかしてた
憎い恋しい 憎い恋しい
めぐりめぐって今は恋しい
雨々ふれふれ もつとふれ
私のいい人つれて来い
雨々ふれふれ もつとふれ
私のいい人つれて来い